

## 12 昨年度指定された天然記念物（地質）

### — 五色ノ浜の横浪メランジュ(土佐市宇佐町竜<sup>りゅう</sup>) —



現在の日本列島の骨格は約3億年前からの海洋プレートの沈み込みに伴う地層の付加作用により形成されてきたことが1970年代以降、明らかになってきました。土佐市横浪半島の五色ノ浜の海岸は、こうして付加された四万十帯と呼ばれる地層の典型です。海嶺で形成された海洋プレートは、日本列島付近に到達し、沈み込み始めます。海洋プレート上には、玄武岩・石灰岩・チャートなどの地層が順番に堆積。さらに海洋プレートの地層の上に陸側から供給された砂や泥の地層が堆積します。これは、海洋底層序と呼ばれるものです。地層群の一部は、プレートが沈み込む際にこそげ取られ、これが付加体となります。付加体は、海洋プレートの上に堆積した地層と陸側から供給された地層が、複雑に混ざり合い著しく変形したメランジュと呼ばれる地層と比較的変形の少ない砂岩泥岩の互層（整然層）で構成されます。五色ノ浜の横浪メランジュは、このような考え方が世界に先駆けて証明された場所として世界的にも重要です。（平成23年2月7日指定）

### — 小鶴津の興津メランジュ及びシュードタキライト（四万十町小鶴津<sup>こつるつ</sup>） —



五色ノ浜と同様に四万十町小鶴津の海岸には、四万十帯と呼ばれる地層が典型的にみられます。興津メランジュと北側の野々川層とを境する興津断層からは、高速での断層運動により岩石が溶けた証拠とされるシュードタキライトを含む約5000万年前の震源断層（地下深部の震源領域の断層）が発見されました。シュードタキライトは、過去の地震を起こした断層運動の証拠であり、付加体の形成の過程でより長い時間をかけて地表部に露出したもので、プレートの沈み込み帯からのシュードタキライトの発見は世界で初めての事例です。現在の四国沖の南海トラフでは海洋プレート（フィリピン海プレート）が沈み込みを続け、付加体が形成されつつあり、南海地震などの海溝型の巨大地震を発生させてきました。興津メランジュは、南海トラフで繰り返されている巨大地震の発生メカニズムを知る手掛かりになるものでもあり、地震防災上も重要です。（平成23年2月7日指定）（県文化財課 中内 勝）